



pika pika  
あなた2逢いたい☆



hi-chew s

## 大根サラダ

---

「そう。そうだったんだ．．．」

と、会社の先輩矢野かおるの言った事に対して山田マヤは呆然と無表情で応えた。

その後マヤの表情がすぐに曇ったのを矢野は見逃さなかった。しかし、自分が言った事がそんなにマヤの無知さを否定する表現だったのか、または表情が曇ってみえたのはただの思い過ごしなのか、などを咄嗟に判断つく能力は持ち合わせてないと矢野は自分で承知なのでとりあえずマヤのために残りわずかの大根サラダを小皿に盛ってマヤにそれを差し出した。

「そうよ。だから社長はすごく嬉しいのよ。あんなにできる彼がまさかこんなに小さい会社に正社員として引き続き残ることになったんだもの。まあ噂ではダイヤ君と社長の娘ができてるから居残ったとかも聞いているけど。いずれにしる会社にとっては良かったよね？山田さん、はいはい、食べて食べて！減ってないけどビールは？」

と明るい声で食べ物と飲み物をマヤにすすめた。

～原因不明だけど元気だしてよ、あとで相談にきていいわよ。                      さりげなく優しいキレイな先輩矢野はここよ～ と訴えるように。

「あっ、ありがとうございます！．．．結構この大根サラダいけますよね。さっきから私のほうが食べててすみません。何か他に揚げ物系頼みますか？矢野さん次は？私は梅酒サワーにしますけど矢野さんもそれでいいですか？一緒に頼んじゃいますよ。」

と、マヤは今度は矢野にも負けない明るい声と身振りでふるまった。まるで

～やのさん、気遣いサンキュー。でもさっきのがっかり表情は忘れてよ。ぱあっと飲みましょう～ と弁解するかのように。

マヤはこの矢野との初めての社外での飲み会が終了し、駅で別れるまではずっとこのテンションを保ち続けた。おかげでマヤは浴びるように飲み食べづくし、会計のときには結構気分悪状態になっていた。しかし今度はそのことを表情にも何にもあらわさないよう注意して矢野と駅へ向かって歩いた。

矢野は3番線ホームへ、マヤは1番線ホームへと向かった。金曜日で混んでいる電車の中、ぽかんと空いている席をみつけ、マヤはそこにスコンと座り、頭を下に垂れた。そして矢野がさっき言った、マヤにとっては衝撃発言が頭に浮かんできた。

「．．．違うちがう。ダイヤ君は大学生だったからパートなんで午後からきてたの。先月大学卒業して今月から正社員だから今は午前中からきてるのよ。山田さん知らなかった？」と。

「ダイヤ君先月まで大学生で卒業してやっと社会人になったなんて！ってことは年は22あたり？私は去年まで人妻で．．．」

そこでマヤは突然吐き気をもよおし、頭の中がぐるんぐるんと周りだした。

ぐるん　ぐるん　ぐるん　ぐるん　ぐるん　ぐるん　ぐるん　ぐるん

to be continued

## 馬は走るけどマヤは

---

ぐるん ぐるん ぐるん。。。

心臓がどっくんどっくんどっくんどっくんどっくんと どんどん早さを増した。

次には ピーポーピーポーピーポーピーポー

さらに うう～～～ん (道路開けてください～)

そして おんぎゃーおんぎゃーオンギャー.....

・  
・  
・

オンギャーは実際なかった。

とにかくマヤはかなり、本当はかなり飲み過ぎ、酔いが大波のようにマヤをのめり込みそこでおぼれるようにぐるんぐるん周り、心臓も尋常ではないほど早くなっていた。このままこの状態が続けば.....

「私 死んじゃうのかな？」と ふとマヤは思った。

そのとたん、ダイヤ君と初めて出会った日のこと、数少ないダイヤくんとおしゃべりした貴重な思い出、ダイヤ君をもっと意識しはじめた自分の姿など走馬灯のように次々と 後から 後から マヤの心の中に浮かび上がってきた。

ダイヤ君と初めて会った時... それは今年の1月。

離婚後、インターネットでフルタイムの仕事を探し、履歴書を提出始めたのが去年の11月中旬頃。年末近くであったし、長期のブランク、30代後半に近い、また特に手にスキルがあるわけでもない、ただでさえ就職難なのにさらに自分は難であるので、応募に対してすぐ反応があることはない、とマヤは覚悟していた。全くそのとおりだった。その為12月は就活をせず、のんきにクリスマスケーキづくりやらショッピングやら年賀状書き、実家の家掃除の手伝い等して年末を過ごした。新年1月1日の翌日、11月に応募をだしていた会社から面接にきてください、とマヤに連絡があった。それが今現在勤めている会社である。その翌日3日に面接となった。

午前9時に面接が始まり、30分には終わった。「内定がでてこの会社にはくるまい...」と1階に下るエレベーターに乗ったとたん、自然に頭の中でマヤはつぶやいていた。

すると

ヒッヒイイおイイ〜〜ん

と明らかに高らかな馬の声が聞こえ、マヤの視界には白い馬が前足をあげて、わかりやすくいえ



ばナポレオンの有名な画の状態でごんごんと、その上にはなんと、、、

「フッ、フッ、フジワラさん!!」とマヤは目をまんまるくし、のけぞっている馬をうまくあやつっているフジワラをみつめた。死んだはずのフジワラが白馬に乗ってエレベーターの中に突然登場したのである。フジワラ氏とは...この本の概要を読めばご存知、マヤの12才年上の仲良しおじさんである。仲良しおじさんって？

2年前の新婚旅行のハワイでマヤはフジワラ氏に出会った。フジワラはハワイで寿司屋を営みながら、しょっちゅうサーフィンで遊んでいた。新婚旅行だったが、マヤの当時新夫はハワイに着いてからずっと気分が優れないのでよくなるまでホテルで

休む!とばかり、しょうがなくマヤは旅行初日から一人でビーチまで行き、キレイな海の中で遊んでいた。最初は楽しくしていたのにそのうち高波にもまれておぼれてしまった。幸いフジワラはそれを見つけ、マヤを助けあげた。フジワラはマヤにとって命の恩人になった。翌日新夫は具合悪いので一人で帰国することになり、ホテルはキャンセルされた。しかしマヤは帰国せず、フジワラの豪華別荘に滞在させてもらうことになった。滞在中はずっとフジワラからサーフィンを学んだり、食事をしたり、ハワイ案内をしてもらい、大変楽しく充実した日々を過ごしていた。タダでこんなにしてもらうのも気が引けると思い、マヤは氏の寿司屋でウェイトレスとしてお手伝いをした。そんな理由で四六時中フジワラと一緒にいるので、すごく色々しゃべり、12才年齢は離れていたが、話しも合い、男女の仲、というより親友のように仲良しになった。もちろん、フジワラはマヤは結婚してることも知ったし、マヤもフジワラは6年前にハワイアンとの妻と離婚したことも知った。氏の高級一軒家は別荘から車で30分離れているところにあり、マヤの滞在中別荘でお泊りなどなかった。密かにフジワラはマヤを超好きになっていったが、二人の間は完全プラトニックで、やましいことは起らなかった。現実を忘れ、ハワイの素晴らしい自然、環境、そしてフジワラと一緒にいるのが本当に楽しく、調子こいてマヤは1ヶ月間も滞在してしまっただけでなく、日本帰国後もskypeやメールなどで毎日のようにずっとフジワラと連絡をとっていた。しかし連絡が突然ぱたっと途絶えてしまった。メールも電話もなく、それが3ヶ月間続いた。氏の寿司屋に電話してもずっと留守電になる。「連絡とれないのはただ具合悪いとか店い

そがしいとかだわ。あの楽間的フジワラさんに限ってそんな深刻なことはない！」とマヤも楽間的につとめてたが、限界になった。これは何かおこったと考えざるおえない。誰かにこの件で連絡をとろうとも、フジワラの友人、ラーメン屋「紫」の佐藤さんにしか聞く方法しかなかった。インターネットから「紫」の電話番号をみつけ、電話をすると佐藤さんがでた。マヤだとわかるといきなり泣き崩れた。「マヤちゃん!!!... マヤちゃんに知らせたかったんだけど、連絡先わからなかったし、僕も（ヒックヒック）本当にショックで何もできなくて。。ごめんね。。じつは、じつはフー君とサーフィンやってたんだけど、そんときフーくんね、事故っちゃって...（どーっ激泣）」フジワラはサーフィンで他界した、とわかった。



仲良しおじさんフジワラ氏はマヤとこんな風だった。

面接後のエレベータのシーンに戻るが、復習すると、そのシーンはマヤが飲み過ぎて気分が悪くなり、マヤが大変好きになっている、ダイヤ君と自分の世代の違いを知り大変ショックを受けたためさらに落ち込んで頭がぐるぐるんした。ぐるぐるんの最中ダイヤ君と初めてあったときのことなどの思い出が走馬灯のごとき脳裏に次々わいてきた、そのシーンはその中の一番最初のものである。次は会社の面接が終わりエレベーターに乗り1階に行くという流れになるので、**白馬の乗ったフジワラ氏登場**は番外であった。しかしマヤはフジワラの1年前の突然の死と突然の別れでかなりショックを受け、お化けでもいいから現れて、と強くいつも願っていたから、コトバでは表現できないほどフジワラに再会できたのがどんな形であれ嬉しかった。

どれくらいマヤがフジワラの死にショックだったかというと、足や腕に血管がうっすらあらわになるほど激やせし、何もやる気力がなくなり、当然家事もできなくなった。そんなマヤに夫は心配するどころかすぐく腹をたて本気で怒った。それでもマヤはぼかんと空をみていた。夫は、こいついかれてると思った。新婚旅行のマヤの行動から、夫はかなりマヤには愛想尽かしていたがそれがここで倍増になった。それから夫は堂々と20代ぐらいの女性と仕事から帰宅するようになり、寝室に共に入っては籠もり、朝になるとその女性と夫は、夫の出勤時に合わせて一緒にでていった。毎日、毎日。さすがの無気力マヤもこれには反応した。なんせその女性の歯ブラシセット、化粧道具、ドライヤーなどが洗面所を占領し、その女性のヒールなど靴が何足も玄関に置かれ、なんとも迷惑に感じてきた。もっと迷惑かつ気持ち悪いのが夜中になると女性の悶え声やらギシギシとベッドの音が響いて聞こえてくるのである。さらに夜中のシャワーの音、二人でキッチンやリビングルームにでてきて料理をつくったり、おしゃべり、DVDの音。マヤはこれらにはもう耐えきれず、荷物をまとめ実家に戻った。マヤの両親は娘の激やせぶりに大変心配し、何が起ったか聞いた。事情を知り、両親は娘に悪かったと反省し、今度は離婚を大サポートし、スムーズかつ早く離婚となった。実はこの結婚はマヤの父の会社の大の大お得意様、平松の紹介であった。その為マヤが断るにも両親が「なんで？マヤちゃん、あの平松さんからご紹介の方よ。乗り気でないなんて何？ご紹介を断るなんてママもパパも絶対できない！これは不可能なの！おわかり?!」の一点張りだった。断る余地もなかった。

「あんなに会いたくてしかたなかったフジワラさんが目の前にいる!!!」マヤはもう嬉しくて嬉しくて涙があふれそうになったが、「フジワラさん、なんで馬？サーフィンに乗って登場じゃなかったんですか？」と、とりあえずつつこみをいれた。

フジワラは「そうしたかったけど、マヤちゃんが走馬灯のようになっていうからあわせたんよね」とニコニコしていった。

「っていうか、．．．フジワラさん!!会いたかった、本当に、本当に!うれしい!うれしい!」

涙はあふれ、思わず馬にのっているフジワラに飛びつき、抱きついた。マヤとハグ（抱擁）は初めてだった。フジワラはすごくうれしかった。マヤの細い体を軽く両腕でつつみ、10秒ぐらい抱擁とマヤの匂いを楽しんだ。そして「さあ乗って乗って。行くよ」とマヤの腕をひいた。

「行くなってどこへ？ 次のシーンはエレベーターで1階に行き、ビルからですすぐ向かいのコンビニに入るのよ。そしてバッサバッサと書類を落としたときにたまたまそこを通りかかったダイヤ君が通ってそれらをひろってくれる、ダイヤ君と初めて出会った大切なところなのよね。。。そこまでフジワラさんと馬に乗って行く、ってこと？」



フジワラがため息を軽くついた。そのときマヤはハッと、しまった、と思った。そして心の中で

「せっかくフジワラさん私の前に白馬のナポレオン調で現れてくれたのにダイヤ君のことばかり考えててフジワラさんに悪かったな。だって、フジワラさんは私のことをたぶん。。。言われてないけどおそらく。。。自意識過剰の勘違い野郎かもしれないけどフジワラさんは私を好き。。。」

するとフジワラはゆっくり目を閉じ、深呼吸して、優しい口調とやや緊張気味に

「そのとおりだよ、マヤちゃん。勘違い野郎だよ、君は。僕は君のことを。。。」

「やだ。。。フジワラさん私の心読めるの？今までずっとそうだったの？！なんで教えてくれなかったの？

何か、すっごく今恥ずかしい。。。！私何かばかみたい！」

とマヤは初めてフジワラに対して攻撃的な口調で激しく強く言った。

そんな予想外のマヤの反応にフジワラはびっくりし、

「いや、違うよ！読めたのは僕が死んで。。。」とマヤに弁明しはじめようとしたきドン！！ヒヒヒーン！どたっバタッ！

「いたっ。。。んなっ、なんで、マヤちゃん！」マヤはフジワラを両腕で力いっぱい突き落とし、フジワラはエレベーター内でなくエレベーターホールへ落馬した。速攻マヤはひょいとその馬に乗かった。

「ごめんなさい、ちょっと馬かります。下にいてダイヤくんのところいってくる。そこ初めて会う大切なシーンだから私一人で行ったほうがいいと思うの。非常階段からいくわ。」

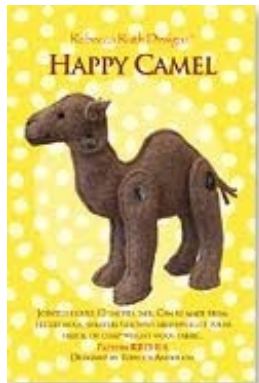
ベルばらのオスカルのような（または暴れん坊将軍のような？）華麗なさばきで、馬の向きをくるっと替え、閉まりそうなエレベーターのドアをするっと抜け、マヤをの乗せた白馬は非常階段のほうへぱっかぱっかと走っていった。エレベーターは閉まり、下り、突き落とされてエレベーターホールに残されたフジワラは

「。。。死んでからマヤちゃんのことずっと会いたくて会いたくて、そしたら空からマヤちゃんの姿がみえるようになって。。。そしたら最近時々だけど心までもみえるようになってっただけなのに。しかしマヤちゃんの行動は読めないな。。。」と倒れたまま横になってぼーっと考えていたら

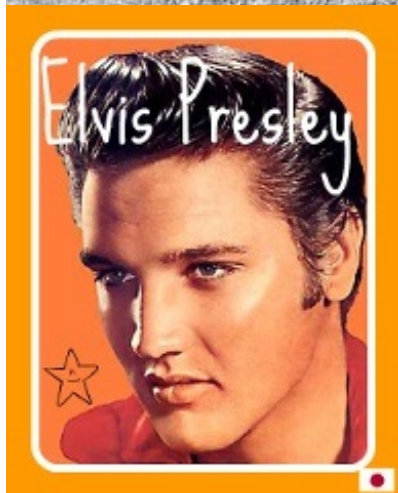
「どうしたんですか？ご気分でも悪いのですか？」と女性の声の上から聞こえた。見上げるとぱっちりスーツを着込なし、ハイヒールに、髪をアップにした、いかにもキャリアウーマンスタイルの女性がフジワラに声をかけた。矢野かおるであった。

「だ、大丈夫です。ただ軽く落馬しただけですから。」

上体をゆっくりおこしながら、矢野を見上げてこたえた。矢野は倒れててよくみえなかったフジワラの顔を確認すると、「ハッ．．．<3」と、フジワラの端正な顔立ちにときめいた。そして自分を少しでも可愛くみせるよう切れ長の目をぱっちり見開いて



「らくバ？それともらくダ、とおっしゃいましたかな」



「まさか、ラブミ〜テンダ〜 呼んで．．．エルビスプレスリー？なわけないですわよねん。うふふ、母がプレスリーファンなのよん。ああーもしかして！ラップ？yo yo っつてずっこけてしまった、ってことでしょうかしらん？」

と矢野の無理なブリッコ口調は崩れてきた。フジワラはサーフィンをしていた故、体全体に程よく筋肉がついて引き締まった体型で、それはまさしく矢野の好きな男性のタイプなので、彼女はぱっちり開いた目をきょろきょろさせ、口調も可愛らしくなるように試みたのだった。フジワラは一般的にイケメンに属し、初対面で彼に会う女性はほぼ全員、多かれ少なかれ一瞬にして彼にときめいたり、好意をもったものだった

――マヤを除いては――

フジワラはマヤと知り合ったばかりのとき、彼女のことを同性愛者だと信じていた。なぜなら他の女性がするフジワラを惚れ惚れする視線をマヤから一向に感じた事はなかった。しかし仲良くなっていくうちに、マヤは外見はすごく可愛い、いわゆる、“ちょっと変わってる子”だと判明した。さらに彼女が結婚しているともわかった。フジワラは、*世界には僕になびかない女性もいたんだ*、と感動したのだった。それがあからこそフジワラはマヤに執着しているのかもしれない。

ついに自分に抱きついてきてくれたのに．．

やっとつかまえることができたのに．．

もう逃げないようさらって、一緒に白馬に乗ってどこか二人だけの世界へ向かって行

こう思ったのに（オー、イエ〜!）

そして

「君のことをこの世で、あの世で、世界で、宇宙で、誰よりも愛しているんだよ、っていいなかったのに！」

フジワラは日常では絶対言えない照れ臭い台詞をブツブツつぶやいていることもかまわず、我を忘れて、矢野が言っていることも気にせず、ただただ感傷気分ひたっていた。そして突然精神的な疲れがどどーっと降り掛かり、ガクッとなった。

矢野はフジワラを惚れ惚れとみつめていたが、その落ち込みぶりと異常なほどの顔色の悪さに気づき、

「顔色すごく青白い！．．．顔だけじゃなく体全体青白。まるで死人．．．。とにかく救急車よびましょうか？」と聞いた。

## 1 st ピカピカ

パッカ\*ポッコ \* \* ポッコ\*ポッコ \* \* \*

白馬は大分疲れていた。もうゆっくりでしか歩けない。走るなんてとんでもない！という状況。非常階段の下りなんて走ったらズルっとこけると白馬も十分わかってたから、ぴよこたんぴよこたと、マヤを乗せて慎重に下り階段を踏みしめた。白馬はマヤに走れと罵倒される前に説明した。

「前日午後5時までの予約なしにもかかわらず、私は急にフジワラさまからご指名いただき、かりだされました。通常でしたら、絶対断るし、断る権利もあります。でもフジワラ様がどうしても白馬の君でないと行けない！マヤちゃん今走馬灯中なんだ！ってすごい熱弁するんです。フジワラ様のようにあんな素敵な男性にご指名されるのも本当この年になって久々だったし、フジワラ様が乗っかってくれるなんて、. . . 女性として嬉しくなっちゃいました。なので今回は特別に予約無し予備練習なしでフジワラ様の為に走ることにしました、でも下界へ行くような長距離は5年ぶりでしたし、そしてフジワラ様、道間違えてロシアにいっちゃってよけいな距離を走っちゃって。しかも寒かったし。そんなこんなですごく私は疲れましたが、それをみせちゃいけない、今日のベスはフジワラ様の為にベストを尽くすのよって自分にいいきかせてきました。今はフジワラ様が落馬したおかげで気が抜けちゃってごめんなさい。あ、私エリザベス、通称ベスと申します。」白馬のベスはにこっとした。なんて長い説明なんだろう、とマヤはまず思ったが、それはおいといて、

「ベスありがとう。いいのよ。今はゆっくりして。」とベスの頭をなでながらいい、「というか、こんなじゃ馬に乗って下に行く意味ないじゃん！」ときづき、じゃーねとベスに手を振って、11階から1階まで階段で下った。

ビルの向かい側にあるコンビニエンスストアに入った。店内を見回したが、天然しなやかなウェーブが入った薄茶の短いヘアスタイルはみえない。ダイヤ君はいつもその外国人のような、ライトブラウンのやわらかい髪質の短髪スタイルを保っていた。身長は187cmくらいの細身の上、顔は童顔で、目の色も黒というより濃いブラウンなので、よく人から、外国人や外国人とのハーフの子とされていた。

マヤはさらに早歩きで、商品陳列の通路をジグザグにスタスタ歩いた。立ち読みしてる6人の中にもいない。そしてレジ付近にもいない。

「もう買い物して外にでてっちゃったのかな」と思っていると、レジの脇の奥のほうからトイレの水の音とボタンとドアが閉じる音が聞こえ、男性がでてきた。 ああ！ ダイヤ君！

ではなく56才ぐらいのおじさんだった。ガクッと残念だったが、奥にトイレがあるとわかり、ベスをなでた手を洗いたかったので、ラッキーと思い、すぐトイレのある方へ向かった。ベスには悪いなと思いつつ、手を石けんでゴシゴシ洗っていると、指や手が普段より全然白く、やや細くなっているのに気づき、石けんの泡を流し終わった後も、自分の手を不思議そうにまじまじと見つめた。次に洗面所の上にある鏡をとおして手をみたとき、

「私の顔！真っ白！真っ青！！やつれてる！！　　まるで死んだ．．．」マヤは息が止まるくらいとてもびっくりした。手の白さ細さにもびっくりだが、まさか顔まで。

そしてマヤは自分は今、走馬灯のように浮かんでくる思い出の真っ最中にある、ということを出し、そしてこの生気のない、まるで死神のような顔になっているのは、同時に死ぬ真っ最中にあるのが原因かもしれないと思った。

「死んでいるフジワラさんが現れていることは私はもうこの世じゃなくてあの世にいるって考えられるけど、でも今起っている事は、（気分悪い最中でも）生きている最中浮かんでくる思い出の中で起っている事。だとしたらまだ生きてるってことよね？」と自問自答し、通じて筆者も書いている状況を整理した。

「私は生きている。そしてダイヤ君に会う！」

マヤは鏡の中の死神のような自分に励まし、スマイルをした。

コンコン　ドアをノックする音が聞こえ、「すみません、今でまーす」とマヤは外でノックした人に聞こえるよう大きな声でいい、ドアを開けた。

「オー　マイ　ガッド！」マヤは更に心臓が止まる位びっくりした。そんなときマヤは英語口調になる。そして宝塚、またはミュージカル調に

～♫ トイレの中は電気がついていても薄暗くうす汚い　自分もそれ同様薄暗い生と死をさまよっている　なのに　あああ　なのに　私の最愛のあなたは　なぜに　なぜに　そんなにそんなに　ピカピカ　ピカピカ　輝いているの？　♫～  
ダイヤ君がノックしてトイレの外で待っていたのである。



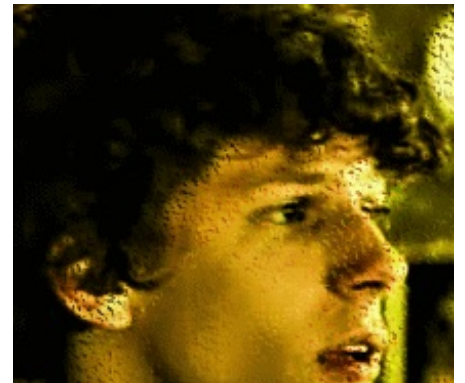
マヤの心臓は ドクンドクン としていた。



全然私生きてる. . . と 安心し 不思議そうにマヤをみているダイヤ君にすみません, という意味で頭をさげたままゆっくりトイレから出ようとした。トイレに入ろうとするダイヤ君とすれ違う、とても短い間に、何かおこるように、マヤは下向き加減で、なるべくゆっくりと外へ歩をすすめた。

ダイヤ君が何かマヤにいいかけたそう、マヤはそんな気配と視線をダイヤ君から感じた。実際、ダイヤはマヤの方をむいて、何か話そうと口を開けかけた。しかしこの2人がすれ違う間は、話しかける機会をみつけるにはあまりにも短く、ダイヤはトイレのドア内に完全に入ってしまったので、あきらめ、ドアを閉めた。マヤはため息をつき、しょうがないと思った。

このままダイヤ君がでてくるのを待ってようか. . . そうよ、何か適当に選んだり買ったりしてたらダイヤ君トイレからでてきて、そして。。。ああそのときまでにどうやって話しかけるか考えとかなきゃ。



実際ダイヤ君と会ったときは、コンビニに入ってすぐ横の雑誌の陳列棚に、好きなモデルが表紙を飾っているファッション雑誌に目に入り、それに手を伸ばしたとき、封筒からだして脇にはさんでいた、面接のときにもらった会社案内、会社の宣伝広告、社内規則などの書類がバサッと落ちてしまった。全ての書類は会社の封筒に入っていたが、エレベーターに乗って一階へいく途中

それをだして、ぱらっとみて、これからどうするか考えていた。「いきなり“ぜひ来週からきてよ”って言われたのにあまり嬉しくない。平均よりかなり給料少ない、残業代、ボーナス無し。それに面接してくれた人何かにつけて隣に座ってきて、超フレンドリー口調。面接やってること忘れてるって感じ。あの人を面接担当にする会社って何か信用できない。それにそんな大きい会社じゃないし、今決めなくても、もっといろんな会社探したほうがいいかしら？」

そんな考え事をしながら、コンビニに入り、何も考えず読みたい雑誌をとろうとして、書類がそこをちょうど通ろうとしたダイヤの目の前に落ちた。ひろわない理由にもいかないので、急いでひろおうとしたら、今度はダイヤ君の持っていたペットボトルがスルッと落ちて、ペットボトルの水が落ちた書類にかかってしまった。ダイヤはごめんねごめんね、と過剰な程マヤにあやまり、次にさっと彼自身のティシャツを脱いだ。（その下にもシャツを着ていた。）ティシャツを布巾代わりに、書類についた水をふきとった。

なんて親切な若者！顔はかわいくておとなしそうなのに、なんかワイルド！気に入った！

なんて思っていたたら、ダイヤは

「xxxxx会社 にいったんですか？」と会社案内をまじまじとみながらマヤに聞いた。



マヤがはい、と答えようとしたとき、ダイヤは会社案内の下に重ねてあった就業規則の冊子に気づき、

「入社．．．するんですか？」

と興味深そうにマヤにたずねた。マヤは最終的に決断していないが、この会社には入社しない方向でいた。しかし知らない人にそんな立ち入ったことを正直に答えるべきか、しかしかわいしまさしく自分のタイプの男の人だから、まっいっかなー、などと迷って返事に躊躇していると、ダイヤは初対面の人にいきなりそんな質問して失礼だったかなと思い、でも自分がそれを聞いたのは理由はあるから、と言い訳けするかのようには話した。

「すみません、実は僕そこで働いてるものですから。あそこ色々な事業に手を出してる割には人手が少なく、働いてる社員、全員忙しいです。でもその分やりがいはあるし、なんでもまかせられて、とても勉強になります。」

話しおわると、はにかみながらマヤにかすかな微笑みをかけ、「はいっ」とひろった書類一式を手渡した。それらを受け取るとき、マヤはダイヤの深く濃いダークブラウンの瞳をまばたきせず、真っすぐみつめながら、

「ありがとうございます。書類。」

—— この美しいダークブラウンの瞳を、ずっとみつめていたい —— と強く心の中で念じていた。

「そうなんですか。働き始めたら楽しそうな会社そうですね。私最初は．．」

とマヤがいかけたとき、携帯のバイブ音がダイヤのズボンから聞こえてきた。ダイヤもマヤをみつめ返しながらも早業ごときジーンズのポケットから携帯をとり、電話にでた。「あ、うん、うん。。今コンビニ」といいながら、目を細めて、「ごめん、失礼する」と示唆するように片腕をあげ、電話の会話に集中しながら店の外に出、たばこをとりだし、吸いながら電話を続けていた。

「．．最初は全然あんな会社いかない、と思ってた。でもあなたに会ったら、いったほうがいいかなと思いました。だって一緒の職場ならもっとあなたを深く知ることができと思うから。あなたの瞳のダークブラウンの深さと同じぐらいに。。。なんちゃってえ！！！」

と実際にいえたかどうかわからないが、ダイヤに言うはずだったことを頭の中でつぶやいた。外でたばこをすっているダイヤをガラス越しにみつめながら、タバコ吸うのあまり似合っていないと思った。次に手にとったファッション雑誌の表紙になっている好きなモデルをみて

「この人もかっこいいけど、あの子の瞳にはかなわない」

ページを開きもせず棚に戻し、まだ外でたばこをすいながら電話で話しているダイヤをみた。タバコ吸い終わったらまた中に戻るかなと期待しつつ、パン売り場のほうへ歩いた。

以上がダイヤとマヤが一番最初に出会った時のことである。

今回（この走馬灯のように浮かんできた思い出の中）では、出会いのキーとなる、会社案内の書類を手を持っていない、ということにマヤは気がついた。おそらくエレベーターの中か、ホー

ルか、非常階段に落ちているに違いないと思った。

「xxxxx会社の評判を聞く？だめだめ、いきなりそんなの不自然だし、ダイヤ君がそこで働いていることをまるで知っているかのようだよ。」 マヤは困っていた。

一方、トイレの中でダイヤは思っていた。

「今すれ違った子、すごい顔色悪かったけど、確か会社案内落としの子だよな。大丈夫かな。。。」

次にあれ？と思った。

「でも結構前にコンビニからでて、僕にお辞儀して横断歩道渡って行って。それから10分ぐらいしたら遥が来たから。」

遥とはダイヤと携帯で話していた、ダイヤの彼女であり、xxxxx会社の社長の娘である。コンビニの前で遥と待ち合わせしていたのである。

「気分悪くてわざわざこのトイレに戻ってきたのかな？．．．」

とマヤのことを心配し、

「さっきはあんなキラキラ輝いた綺麗な目で自分をストレートに見つめててくれたからドキドキしちゃったけど、なんか嬉しかったな。でも今は本当気分悪そうに下向いちゃってる」とマヤのことを心配すると同時に気になっていた。

エレベーターホールに座ったまま顔色の悪いフジワラは矢野の親切なコトバに感謝し、結構いい人、噂好きを除いては、と感じ、

「ご親切にありがとうございます。でも僕は大丈夫．．．．．．．．．． あっ、マヤちゃん?!」

矢野に言いかけてる最中フジワラの脳裏にマヤの思い出の場所、ダイヤと最初に出会ったコンビニでのシーンにてまさしくマヤが死ぬ直前に近い状態になっているのが浮かんで見えた。マヤは奥まった文具が置いてあるセクションでしゃがみこみ真っ青になって考え事をしているようだった。意識は正常そうだが、フジワラは自分も死んだ身だから、今マヤがどの位死の世界に近づいているか想像がつくのである。生を0とし、身体が死（一般的に死）を9、身体は死だが未練があって精神的に死にきれず、あの世とこの世をお化けのようにうろつく状態を9.5、成仏で、残された人々を死の世界から見守る指命に燃え、同時にまたこの世に生まれ変わる準備をしている状態を10とするならば、今マヤは8.8にいるとフジワラは判断した。9になったらよっぽどのことがないと生の状態に戻れない。ちなみにフジワラは一時期9.8までいったが、マヤをあの世からみれることを発見し、心も読めるようになってから9.5から9.6をいったりきたりしている。



「え、私は薫ちゃんですが」と真剣にフジワラに矢野は答えているとき、フジワラは矢野が付けている首もとのペンダントヘッドの月と星に気がつき、すくっと立ち上がり、いきなり矢野の両腕をつかみ、まるで首筋に口づけをするかのように顔を矢野の首に近づけた。矢野は心の中で超舞い上がっていた。（いきなり首? きゃっきゃう!）

一見まるで吸血鬼が美女の首にかぶりつき血を吸っているような体勢で、フジワラは矢野の首もとにあるペンダントヘッドの月にかじりつき、口で月を思いきりもぎとった。ペンダントチェーンが切れ、星のペンダントヘッドは矢野のブラウスの内側にスルリと落ちた。矢野は「きゃっ、あは、何、なに?」と、驚き1/3、嬉しさ2/3みたいな叫びをし、間もなくするとフジワラが口でもぎとった月を見る見るうちにサーフィンボードぐらいに拡大して、フジワラの右肩に立てかかった状態になった。フジワラはその月ボードをつかみ地面に倒し、まるでサーフィンをはじめるときのように地面へふせて乗っかり、両手をかきだした。とたんに月ボードとフジワラは消えた。一部始終みていた矢野はととてもとてもびっくりし、口をぽかんとあけ、目をまん丸くし、呆然とした。現実ではないといいきかせ、自分のほっぺをばしばしたたき、頭と体をぶるぶる激しくふるった。

「覚めなきゃ! 夢からさめなきゃ!」

すると矢野の切れたペンダントチェーンが地面に落ちた。それを確認すると、星のペンダントヘッドが胸元あたりスルリと肌に落ちて感じたシルバーの冷たい感触を思い出し、もしかして と、スカートのウエストあたり下に入れてあるブラウスを外側に出し、体をふるった。思った通り星のペンダントヘッドが落ちた。矢野は深く考えることは苦手な為、『ペンダントヘッドの月

が欲しかっただけならなぜ手ではなく、まるで吸血鬼と美女のように首筋をキスするみたいな方法をとったのか』、というフジワラの不思議な行動を頭の中で再現した。吐息と唇、少し触れたわ、と矢野はその余韻にひたりニヤ〜と笑みを浮かべながら、星と、ちぎれて短くなったペンダントチェーンをひろい、（ブレスレットにしてもかわいいかも） と思いながら握りしめ、満足そうに職場に戻って行った。

「マヤちゃん、死んじゃだめだ。ダイヤ君への思いなんとかしないと僕みたいに**10**の手前でさまよってしまう。」9に入り、約1〜2年間（個人的に長さは異なる。人によっては1ヶ月間）10未満でお化けのようにこの世とあの世をさまよっていると、次第に今まで以外の生き物になり、（人間なら動物、植物など）すぐ10に強制で入れられ、生まれ変わる順番待ちに入る。当然生まれ変わりは10に入った時の生き物になる。例えば死んだ人間Aさん（9〜）が→1年間ぐらい残された自分の子供に会いにお化けとしてさまよう（9.5〜）→次第に猫に変わり（9.999999999...）→完全に猫になり（10）に強制入界。もうお化けとしてさまよいはできない。そして生まれ変わりの順番待ちに入る。→猫としてこの世に生まれ変わる（0）。性別は基本変わらないようだ。

「さっきの吸血鬼ぽいのはなんだ？このままでいると吸血鬼になるってこと？それとも蜘蛛？もうそろそろ僕は人間でなくなって、**10**に入るのか？」これに関してはフジワラにも予測ができない。正直、フジワラはああいう吸血鬼っぽいことを綺麗な女性に死ぬ前にもやりたがっていたが、冗談か芝居か酔っぱらってるか以外に実際やることは考えられなかった。「絶対人間に生まれ変わりたい。かといってマヤちゃんを放って**10**にはいけない、かといって人間以外の物になって生き返りたくない」月のボードに乗りながら、色々フジワラは考えた。マヤのこと、自分のこと。

「そういえば、バスに乗って走馬灯のマヤちゃんのところに行ったのは、一緒に一気に**10**に行けばいいんだと思ってたからだ。マヤちゃん、僕の事すごく恋しがってるみたいだったし。でも実際はダイヤ君の方がよくて、僕突き飛ばしてダイヤ君との思い出場面までバスに乗っていったし。」するとタイミングよくバスがびっこをひきながらあの世の方向へ帰る後ろ姿がみえた。フジワラは、あれ、もうお帰り？ と思いつつも、バス若くないのに僕のためにがんばってくれたととても感謝の気持ちでいっぱいになった。

「バス〜！どうもありがとう〜！気をつけてかえってね！」とフジワラはバスに大声でいった。「帰りはこのサーフィンボードじゃあの世に着くまでに1週間はかかりそう。その間にもし他の生き物に変わったら...」と考えてる最中、バスは立ち止まり、ゆっくりとフジワラの方に振り向いた。

「フジワラ様、一キロメートル先あたりに、緑の光った500円玉くらいの円があります。そこがマヤ様がいるところへたどり着くショートカットです。小さいから見逃さぬように。あと、お帰りはバス〜と心で念じていただければいつでも参りますわ。」と心でフジワラに伝えた。

「ありがとう、ベス！僕がいつまで人間でいられるかわからないけど、もしまだそうだったら、帰る時は呼ぶよ！！」

フジワラも心でベスにこのメッセージを送り、それを受け取ったベスはにっこりスマイルしているようだった。そしてくるっと向きを変え、あの世へ向かってびっこをひきながら去った。

「しかし、本当に呼んだら来てくれるかな？あの調子じゃベスは結構老齡だから、帰ってからは数週間寝込んでしまうかもしれない。うん、そのほうがベスの為にもいいけれど。。。」

突然フジワラの脳裏に、マヤが真っ青になってしゃがみこんでいた状態からふらーと横倒れになる場面が浮かび見えた。

「マヤちゃん！（いろいろぐずぐず考えていられない）今行くから待ってて！」

と慌てながらあの世とこの世の中間にある空間に渦巻いて大波が活発にたっているなかを、月のボードで乗り渡し、ベスが教えてくれた、マヤのところへ近道で行けるといって、1km先の緑の光を目指してずんずん進んで行った。

「このスピードなら1kmなんてすぐだ！」とフジワラはここでサーフィンの実力が発揮できるなんて。。。と感動も少し感じていた。もう1kmと思われる前後になるとフジワラはスピードを落とし、注意しながら緑の光を探した。しかしみつからない。ほのかな輝きすらも見当たらない。

「何でだ？暗すぎてみえないのか？それとも光が弱いのか？それともまだここは1kmも達していないところなのか？」そう思った時、目を細めてずっと先のほうに光がないか探した。とりあえずもうちょっと先までゆっくり探しなら行こうとボードに乗っている時に、再びマヤの近況がみえた。マヤは完全に横に倒れていて、おろおろ困りながらマヤをみているコンビニの店員と何がおこったかと思に似た店内にいる客がみえた。

「ああ、マヤちゃん、今8.9だ。。。本当にやばい！」フジワラはベスに場所を再確認しようとした。

「ベス、ベス、ベス！緑の光ないよ！マヤちゃん死んじゃう！ベス！！」

フジワラはだだっ子のようにベスを心に念じて呼んだ。するとベスは

「フジワラ様！何やってらっしゃるのですか？ 100メートル先なんてとっくにすぎましたわよ。。。ちょっと心配でしたのよね。だってフジワラ様、日本でなくロシアに行っちゃたこともあったし。。。」

やっぱり、フジワラはベスが100メートルではなく、1キロメートルと確かに言った事もつっこまず、何しろひたすら猛スピードかつ光を見逃すことなく900メートル戻ることに集中した。実際は、あの世からこの世にくる時、ロシアに入ってしまったのはフジワラの間違えではなく、ベスの判断ミスであった。「ここ入れば北海道の大自然！横切って近道するわよ」といって入り込んだところは北海道でなくロシアであったのだ。

## 2nd ピカピカ

---

「しっかり～」

「ちょっと、もしもし？」

「そんな体ゆらしちゃだめだよ！」

「もうしんでるんじゃない？」

「超かわいくてスタイルいいのにもったいない」

「救急車はもうよんだんでしょ？」

「ちょっとどうする？みてよお！！！」

「警察もよんどく？関係ない？」

「もしもし？ミランダ・カー似のかわいい子コンビニで失神してる！うん、場所はね、  
、、」

「鞆とかに身分証明になるものは？家族に連絡．．．」

などなど、マヤがコンビニ内で倒れたとたん客も集まってきて大騒ぎであった。

マヤは目をとじて顔が真っ白であったが、口をわずかに開き、かすかに呼吸をしていた。

ダイヤがトイレからでてきて、遥がどこにいるか店内を見回した時、何やら騒いでいる人ごみの中にパステルピンクのふわふわロングセーター、ロングブーツを履いている遥が立っているのがみえた。

「どうしたの？」と遥のもとに近づいた時、マヤが倒れているのをみつけ、ああ、あの子！、と衝撃的なショックを受けた。

「なんか倒れちゃったみたいで、呼んでも動かないからみんな騒いじゃって」

遥がいつもの無感情の口調で単単と答えた。ダイヤは「救急車はもう来るの？」と、ダイヤには珍しく、あまりにも深刻に緊急っぽく聞いたので、遥はおもしろくなかったので、

「さあ．．．もう死んでるっぽいから、そんなのきてもムダ？」とわざと意地悪く答えてみた。

ダイヤはいてもたってもいられなくなり、人ごみを飛び越え、マヤの倒れているすぐ横へ座った。そしてマヤの顔に自分の顔を近づけじっとマヤの瞳をみつめ、そして、マヤの口からもれるわずかな呼吸を確認し、「しっかり！今救急車くるから安心して。呼吸そのまま続けて．．．」とマヤの耳元に小さな声でささやきながらもしっかりと力強い口調でいった。

「！！あのマリモの光ったやつだな！！」

ついにフジワラはベスのいう、500円玉くらいの光った緑の円（丸） をみつけた。実際は500円玉というよりも、まるでマリモのようで、それがピカピカ光りをはなっていた。普通に突進すれば、常識に考えればただぶつかるだけだが、ここは生と死の空間であり、マヤのいるところへのショートカットというからには突進してもなんとかなると信じ、フジワラはとにかくその光るマリモにサーフィンで突進した。すると、フジワラとサーフィンボードはマリモより縮小し、マリモの中へスーッと吸い込まれるように入ってしまった。フジワラが入り込んだマリモは人物大に膨張し、ビヨンビヨン数回跳ね飛び、そこからパッと消えた。次にそのマリモは何億万個の光を放いてピカピカピカピカピカ輝きながら、かすかに呼吸をしてコンビニ店内で倒れているマヤの目の前に突如現れた。マヤは憔悴して目を閉じていたが、あまりにも強くまぶしいぴかぴかきらきらする光に気がつき、目を無理矢理開けようとした。そしてゆっくりだが、まぶたは開いていた。視界はボヤーっとしているが、何万億のピカピカピカの光の中からサーフィンボードをかかえたフジワラがいるのがみえてきた。それら全てをみれるのはマヤだけだった。

「フジワラさん！」

声にはならなかったが、かすかにマヤはささやいた。

ダイヤにはマヤがまだ目をしっかりと閉じてはいるが、体をぴくぴく動くのがみえた。ダイヤは「よし！がんばって！」

とマヤの意識が戻ってきた事を確認できて嬉しくなり、彼女の瞳あたりをじっとみつめ、力を注ぎ込むように、マヤの手をぎゅっと握った。マヤが意識を戻しつつあることを、集まってきていた店内の人々にも伝わり、ほとんどの人が安心し、その場を離れ、買い物を続けたり、店内からでたりしていた。遙もダイヤを置きっぱで出口のほうへ歩いて行った。これからのマヤとフジワラの会話は、この生と死をさまよっている2人だけに通じ合って、他の人々～ダイヤ、コンビニ店内の人々など～にはみえない。みえるのはマヤの目を閉じたままの表情と顔色だけで、呼吸の音がかすかに聞こえるのみだった。

「すごい、今7、マヤちゃん助かる」 フジワラはマヤが急速に意識が回復～8.9から7～（通常が5、危篤状態が8.5～8.9）したのがわかり、また、ダイヤがマヤのすぐそばにいることに安心し、

「マヤちゃん、もう大丈夫。危機から脱出したよ。走馬灯からでられる。ダイヤくんもいるし。」

「フジワラさん、ありがとう。。フジワラさんがあんなピカピカと派手に現れなかったら、私絶対意識失ったまま、、、というか死んでいるわ」

マヤははっきりとしゃべった。

「しかもサーフィンボードで。フジワラさんらしい」

マヤは微笑んで、大きな片えくぼをみせながらこたえた。

「はは。ベスは疲れて帰っちゃったし。僕もこれで安心したからもう帰らなきゃ。」

「安心して？何も安心なんてない。もっとここにいて、だって私。。。フジワラさん、言わなくても、私の気持ち読めるんでしょ？」



マヤはとても照れ臭くなり、青白かった顔色はほんのり赤くなった。

「. . . 読めない。さっきまで読めたのに。 おそらく. . . うーん、もうマヤちゃんのこと安心したから、あの世この世の間でうろうろスーカー行為は卒業して、天からマヤちゃんを、ちゃんと、公式に、見守れるようになれるからかなー。」

フジワラは突然マヤの心を読めなくなっていたことに気がついて、正直突然でびっくりしたが、自分なりに読めなくなった原因を冷静に分析し、納得しながらマヤにこたえていった。

「フジワラさん、さっきから安心安心って何？私はフジワラさんなしじゃ全然安心じゃないのに。せっかくこうして今会えたのに. . . 照れ臭くて、ほんと、やだけど、これいうわ. . . 私、フジワラさんがお化けでもなんでもいいから現れてっていつも思ってたの。だから今本当に、本当に嬉しいの。また、ハワイと一緒にいた時みたいにずっと毎日楽しく過ごせないかしら？」マヤは自分の顔から火がでるくらい真っ赤になっている感じがし、そのことも恥ずかしく、もっと赤くなり、ちょうどよい血色になってきた。

「じゃあ、マヤちゃん死んで僕とあの世に行く？そしたらずっと僕に会えるよ」

「そうするわ！死んだらフジワラさんと前みたいにサーフィンしたり、おしゃべりしたり、美味しいもの食べて毎日楽しくすごせるなら。」

マヤはあまり何も考えずに、反射的咄嗟にそうこたえていた。この瞬間のマヤにとって、先のことより、今何を欲しているかだけしか思いつかなかった。

フジワラはマヤの前にしゃがみこみ、マヤの顔にかかった髪の毛をかきあげ、瞳をじっとみつめた

「マヤちゃん、冗談だよ。安心ってダイヤくんのこと。ダイヤ君は一度会ったきりの君をこんなにも心配してる。君の死ぬ瀬戸際にもそばにいて真剣に助けようとしている。それみて安心したんだよ。マヤちゃん死んだら、ダイヤ君は？せっかくマヤちゃんに会えたダイヤ君がかわいそうじゃない？だって、絶対ダイヤ君はマヤちゃんのこと一目惚れしちゃって、これからももっと君のこと好きになって、もっと大切にしたいから。」

フジワラはこういいながらも、*せっかくマヤが命を断ってまでも自分と過ごしたい*といっ  
てくれてるのに、*それって自分が望んでいたことじゃないのか？それを拒んで、さら  
になぜダイヤとマヤをくっつけようとしているんだ？*、と自問自答して訳分からなくなっ  
ていた。しかしまたこう続けた。

「死の世界はハワイっぽくないし、絶対楽しくないよ. . . それに僕はまた人間に生まれ変わる。またハワイでマヤちゃんと会いたいよ。でも今度は新婚旅行で海でおぼれたマヤちゃんじゃなくて、独身のマヤちゃん、今度は僕が年下という設定で会いたいな！」とおどけて話した。

マヤはそのコトバを聞いて涙がとめどなく流れた。

何をいおうとフジワラは（すでにこの世にいないので、遠いところにいるわけだが）もっと遠くに行き、もう自分の前からこうやって現れない、と直感的に十分にわかったからだ。また、自分のことを本当に大切に思うからこそダイヤと自分のことを応援し、この世で一生懸命生きる事を望んでいる、そんなフジワラの優しい思いやりにも感謝し、感動しているから。更に他にもいろ

いろな感情がわきおこっていたから、いきなり感傷的になったマヤにとって涙は止まらなかった。ダイヤを好きな気持ちを大切にしたい、ダイヤがこんなにいい人だからお礼もいいたい、もっと彼をしりたい、そしてドルが100円台にもどってくれないとドル貯金がムダになる～など、あまり関係ないことまで、様々かつランダムな考えがまるでこれも別の走馬灯のように次々と心のなかに浮かびあがってきた。

「マヤちゃん．．僕はいくよ．．．もうしばらく会えないから思いっきりハグしよう！」  
ハグ（抱き合う）したいというのは照れ臭かったがしばらく何十年または何百年またはもしかしたら生まれ変わっても出会える保証もないので、勇気をだして、またあまりシリアスでなく、フレンドリーな感じでフジワラはマヤに言った。マヤはゆっくりと状態を起こし、そしてフジワラがマヤが立ち上がるのを手伝った。マヤはふらつき、そのマヤをフジワラはキャッチし、自然にマヤはフジワラに抱きつく形となり、顔をフジワラの胸に埋めた。そしてマヤは静かに泣いた。ヒックヒックとしゃくってはいるが、泣き声にはならず。フジワラはそれに気がつくともマヤの腕を優しくなでながら、

「泣かないで。じゃないと僕も泣いちゃう。」

マヤはそのフジワラの言い方がおもしろくて顔を上げてフジワラの顔をじっくりとみつめて、くすっと笑った。フジワラはマヤのその笑顔が愛おしく、また、この笑顔がこれからずっとみれないことに非常に悲しくなってきた、一粒の涙がフジワラの左目からスッと頬をつたって流れた。それを見たマヤは、その頬に自分の顔がとどくよう一生懸命背伸びして、そっとフジワラの左頬を口づけした。するとマヤも両目から涙がもっともってあふれでてきた。大降りの雨のようにならずとずと。。フジワラも、マヤの涙でびしょびしょの頬にキスをしたが、

「マヤちゃんしょっぱい」

とぼそそと言って微笑んだ。

「じゃあ．．．」

とマヤは言って、自分の唇をフジワラの唇に軽く重ねた。

「フフッ．．本当にしょっぱい。」

とマヤはつぶやきいた。今度はフジワラがマヤにキスをした。今度はずっとずっと時間をかけ、マヤを愛おしく思いながら、肩を抱きながら。。その間マヤはまた瞳をとじながら涙をずっと流しつづけた。ずっとずっとキスをして涙がでて、またフジワラの腕に自分の体をよせていることで、小さな暖かい安心感を感じていた。涙は止まらないし、キスをし続けているが、もう寝てるような感覚だった。。。。。。

。。。。。。

10分ぐらい続いたと思えるほど長くその状態であったように思えた。そのうち、マヤはフジワラがマヤをまだ抱きしめているのかいないのか、自分が立っているのか横たわっているのかもわからないくらいの無感覚になっていた。それはまるで貧血になったときのように気が遠くなったくら一っとした時に似ていた。

そのうち天の上から

「マヤちゃん 元気でね。 いつか絶対会おうね」

とフジワラの声がエコーして聞こえた。

「フジワラさん？」

とマヤはつぶやいた。そして、涙を流しすぎた瞳をゆっくりと開いてみた。



マヤは瞳をゆっくり開けるとぼやーっと白い天井らしきものがみえてきたと同時に今の状況を把握してきた。フジワラはいない、と。抱き合って、2人での初キスして...私は寝てしまったのかしら？フジワラさんがいなくなったの気がつかなかった。なんで何も言わずに去ってしまったのかしら。．．．とがっかりになった。しかも今いる場所はさっきのコンビニ内の雰囲気ではないことに気がついた。私どうなっちゃたの？ここはどこ？ と、頭を横に動かそうとしたとき

「先生、患者さん、意識戻りました」

という女性の声と、同時にガタッと椅子の音が響いた。

「マヤちゃん！よかった、やっと起きたわ」

とマヤの母は、マヤが横たわっているすぐ横に寄ってきた。マヤを愛おしそうに微笑んでいるが、母の瞳の奥には寂しく悲しさを秘めているものだった。厳しい母からそんな表情をマヤにみせるのは本当に稀だった。



マヤは小さい頃からずっと自分の母を自分には厳しく冷たい人だと認識し、母をただ恐れ、母は自分を嫌いなのだと思っていた。成長するにつれ、そんな母に慣れ、またどんな母であろうと理解しようとした。そうすることでマヤはだんだん母は不器用な人で、うまく本心など伝える事ができないのである。マヤはハッキリと行動や言動で表明してもらわな

いと理解できない性格ではないかと思い、それゆえお互い誤解が生じていたのかもしれないと思った。そう気がついてから、いろいろ母の厳しい態度を理解してゆけるものもいくつかでてきた。未だに全て理解できてるわけではないが。それから、マヤは母だけにだけでなく、他の人に対しても、何故そのような行動、言動などをするかと原因をみるようになってきた。

それゆえに、母がその稀な表情をするのはよっぽど悲しい時があったときで、今回で3回目である。一回めは結婚式の時、2回めは別居してマヤが激やせしたとき。マヤは母のそんな表情をみるのが辛かった。

「お母さん、心配かけてごめんなさい。私大丈夫な気がする。もうすぐにでも歩いて家に帰れる感じ。」

なんとか母に安心してもらおうとできるだけゆっくりとはっきりとした元気っぽい声をだしていた。そう話してる間、マヤは自分の腕にささっている点滴針、様々な病院の機械、テレビ、棚などをみているうちに自分は病院にいて点滴をうっているのは、矢野と飲みに行った帰りに異常に具合悪くなった続きなんだとなどだんだん納得してきたし、クリアになっていった。フジワラがでてきたことと、突然消えてしまったこと以外は。あれは夢だったのか？生と死の瀬戸際にある走馬灯がしでかした、まるで、金縛りにあったときにみえる現実のような夢だったか？でもあのフジワラの涙は夢の中とは思えない。もう二度と会えないと直感的にわかったことも夢の中の

こと？といろいろ考えがぐるぐる頭のなかで飛び交っていた。

「よかったわ。でも倒れてから1日以上気を失った状態で、今やっと意識を戻したわけだから、退院して家に帰れても安静にしないでダメよ。もう会社のほうには1～2週間休みをとるといってありますから。。もしよかったら休んでる間家にくれば？」

「今日何曜日？」

「今日は．．金曜日。水曜の深夜、、まあ実際は木曜日に連絡があって、救急病院にかけつけたらあなたが点滴うたれて真っ青になって寝てたのよ。極度の貧血と急性アルコール中毒で、あと一分でも遅く病院に運ばれてたら命を落とすかもしれなかったって」

やっぱり生死の間にいたんだ、とマヤは理解し、ついでに

「変な事聞くけど、もしかしてイケメン40代の男性や白馬がうろうろしてなかったよね？」

母は目を見開いて、マヤの質問におったまげた感じだったが、ひと呼吸おいてから冷静に、

「たぶんいなかったんじゃないかしら。。ごめんなさい。わたしも忙しくてずっとはここで付き添っていなかったからわからないけど。」その会話を聞いていた看護婦が

「実は私、人にみえないものが見える傾向がありまして、、全て見える訳でもないし、霊能者でもないんですが、サーフィンにのっているイケメンが時々みえまして。工作中でしたのですぐ顔を洗ったり、目薬したら、それは消えました。次にすごいキラキラピカピカした光がまぶしくて。それでまた顔洗ってみずを飲んだらそれも消えたんです。ちょうど患者様の確認の時間だったので、あわてて顔をふかずに患者様のところにいきましたら、患者様の目元がびっしょりぬれてるんです。まさか私の顔の水が垂れたのかしらとか、汗かと思ひふきとったんですが、じわじわとすこしづつ目からあふれでてたんです。なので患者様の意識が戻っているのではと思い、とりあえずすぐ脇に座ってましたら、その後だいたい5分くらいで患者様の頭が動いたのがみえて、意識をとり戻らされたのを確認いたしました。」

マヤはフジワラとのこの一連の出来事は夢ではなかったとこの看護婦の証言でわかりホッとした、しかし、そうするとフジワラとはもうこうやって会えないのかと思うと不安になってきた。

「看護婦さん、どうもありがとうございます。光ピカピカの後に、、何かみえたかしら？」

マヤはそう聞くと、

「いいえ何も．．失礼しました」と看護婦は即座に答え、突然その場から去ってしまった。突然のかわりようにマヤも母もきょとんとしていたら、後から担当医が

「大変失礼いたしました。あの子のいうことは信じないでください。霊とか何かがみえるって時々いうんですよ。注意したのに。本当に申し訳ございません。」

マヤは看護婦が突然去った理由がわかり、そして

『いいえ、ただ正直に看護婦さんはみえたものを伝えてくれたので、私は信じます。ところで、私もう退院していいですか？』

と担当医にいい、今日中にも退院することになった。

担当医の許可が出たその日、金曜日の夕方にはマヤは退院した。母を安心させたいのもあり、また一人ではさびしくなる恐れもあったので、マヤはとりあえず母と一緒に実家に戻り、泊まらせてもらうことにした。



家に戻った時、マヤの父がマヤの為に注文した、特上のお寿司がテーブルにあったり、母は帰りに、マヤの好きなケーニヒス クローネのクローネを30本買ったり、テーブルの上にはクリスタル製のボールいっぱい巨峰、メロン、リンゴや、シャンパンと白ワイン、グラスも用意してあった。まるでパーティのようなテーブルが準備してあった。

「お父さん、どうもありがとう。でも私は今日は

飲めないわ」

「まーお父さんたら、ほんと何も考えてないわね！いつも。」

と母はあきれ顔で父にいった。

「あ、そうか。マヤ、アル中で病院いたんだもんね？しまった。。ごめん！」

「お父さん、アル中って、急性のアルコール中毒だからそんな言い方するのへんよ。ところでマヤちゃんお寿司食べれそう？」

「ごめんなさい。今はちょっと休みたい。後でお腹すいたら食べるかも」

マヤは無理すれば食べれない事もなかったが、無理はよそう、と思った。そのままマヤの部屋だった2階の寝室で休もうと階段を上がろうとしたとき、

「マヤちゃん、とりあえずこれもってて食べなさい。そうじゃないと先生からもらった薬のめないわよ。」と母はクローネ5本と担当医からもらった薬の袋をマヤに渡した。

「ありがとう、お母さん。もしかしたらすぐ起きちゃうかもしれないけどおやすみなさい。お父さんもお休みなさい！」

「コーヒーはできたらすぐ上にもっていきますからね」と母はいい、コーヒーの準備にキッチンに行った。

2階に上がり、マヤは寝室に入ったとたん、ドカッとベッドに寝て、天井をみつめた。

天井いっぱいにフジワラの姿、顔を思い浮かべたが、それはすぐ消えた。

「やっぱり実際現れないとだめ。。本当あいたい。」

と心の中でつぶやいた。じわじわと涙がたまってきて、視界がくもって白っぽくなってきたとき、聞き覚えのある音がした。

..... カッカッ カッカッ パッカ パッカ パッカ



マヤはその音に特に気にせず、フジワラを思い浮かべようとずっと天井をみつめていた。白っぽい視界はさらにさらに白く．．．次第には目の前に白い毛のようなものがなびいていた！  
えええ？ と思ったときには、それはマヤの体にふわっとおおいかぶさってきた。マヤは驚いて、「きゃー」と悲鳴をあげてしまったが、おおいかぶさったものは全然重くもない、むしろ空気が風邪がふわっと体全体にかかってくる感じだった。

「マヤ様。ベスの娘のベラです」

とその白い毛物は言った。それは何を隠そう白馬だった。

白馬だとマヤは目で確認がとれたとき、次にみえたのは、、、、ベラに乗っていたフジワラだった

。

逢いたい

---

「フジワラさん！」

マヤは思いっきりベラに乗っているフジワラの顔を見つめ、自分でも驚くほどの大きな声で叫ぶように言った。しかしフジワラはベラに乗ったまま、ただマヤににっこりと満面に微笑むだけであった。

「私もう二度と会えないと思ってた．．． フジワラさん？何かしゃべって。」

コンコン

マヤの部屋のドアをノックする音がした。

「マヤちゃん、何か音がするけれど、まだ起きてる？」

マヤの母親であった。そういえば母は、後でコーヒーもってくるといっていたわ、と思った。マヤは母には返事せずに寝たことにしておこうとした。せっかく会えないと思っていたフジワラが来ているし、何かいつもと様子が違うけれど、フジワラとの本当の最後かもしれない時間を持ちたい、悪いけれど母に対応している時間はない、と思った。

「会社の矢野さんと．．． わた、綿貫さん？という方がわざわざお見舞いに今ここにいらしてるのよ」

と母はいった。綿貫とはダイヤの姓である。

「ええ？！！ダイヤ君もきてるの？」

マヤは心の中でびっくりし、また嬉しく、ダイヤの顔がみたい、会いたい、と思った。

「私の部屋のドアの向こう側に、今、しかも、フジワラさんもいるときにダイヤ君がいるの？」マヤはそう心の中でつぶやき、ドアの方をじっとみつめ、フジワラにはもうわかっていることかもしれないが、ダイヤがすぐここにいることを伝えようと、フジワラのいる方向に振り向いた。

「フジワラさん、ダイヤ君が今私のお見舞いの為に、ここに．．．！」といいかけたが、

さっきまでいた白馬のベラもフジワラもいなくなっていた。

「フジワラさん？ フジワラさん？！」

マヤはとてもあせり、叫ぶように言った。まさかこの数秒の間に、そして一声もださずにマヤの前から去ってしまうとは信じられなかった。きっと人がきたからどこかに隠れているのかも、と思った。

コンコンコン

マヤの母は再びノックし、

「マヤちゃん何か言った？せっかく会社の方が帰り道にお花もっていらしてくれたのよ。もうコーヒーも準備してしまったし。。。寝てるのかしら？」

と言った。マヤはササッとすばやくドアのほうへ行き、そっとドアを開けた。

コーヒーを入れたマグカップ3脚とクローネを山盛りにもった大皿をのせたトレイを持っている母と、いつも変わらず細い目の矢野と、マヤの気になる存在、ダイヤが大きなチューリップの花束を腕に抱えて目の前で立っていた。目の前にダイヤがいると認めた瞬間、ダイヤはまるで、ピカピカキラキラの何億光の中から現れて、マヤをじっと優しい表情でみつめているようにみえた。それはまるでフジワラがコンビニエンスストアで倒れているマヤの前に現れた情景のように。

「山田さん、大丈夫～？！あの飲みの別れた後倒れちゃったんだよね？本当にごめんなさい！私山田さんがそんなに気分悪かったなんてきがつかなくて。」

と矢野がマヤの顔を見るなり、オーバーに泣きそうな声で、両手のひらで顔を覆いながら言った。

「矢野さんのせいじゃないですので、謝らないでください。私もう大丈夫ですし。本当わざわざ来ていただいてありがとうございます。。。」

とマヤは矢野に言っている時、矢野の左腕につけているシルバーの星のブレスレットに目が入り、なぜか非常に気になりだした。マヤがそのブレスレットについて矢野に言及しようとした時、マヤの母が、

「こんなところで立ち話しじゃお客様に失礼だから、マヤちゃんの部屋に入っていたら？コーヒーも覚めちゃいますわ」

といい、矢野とダイヤをマヤの部屋に入るよう促した。

矢野とダイヤはぺこっとお辞儀をし、マヤの部屋へ、続いてマヤの母も部屋に入りながら、少しぐしゃとなった崩れかけたベッドの掛け布団に気にかけて。そしてコーヒーとクローネのお皿をベッドのサイドテーブルに置き、マヤの部屋から去ろうとして、

「マヤちゃん、クローネをベッドの上で食べかけてるみたいだけど、薬飲むことも忘れずにね。ではごゆっくり。」と言い、部屋から出て行った。

マヤは、ベラとフジワラさんの参上でクローネどころじゃなかったのに、母は何をいってるんだろう、と思った。ベッドの上にどかっと寝た時同時に、母からもらったクローネ5本をベッドの上のどこかに置きっ放しにし、天井をみつめ直ぐにベラとフジワラを現れた。食べている時間などなかったし、食欲もなかった。とりあえずクローネの状態を確かめようとベッドの上をみたとき、薬袋と、半分以上食べてあるクローネと、一口分くらい減っているクローネと、口のつけていない丸々残ったクローネが3本無造作においてあることがわかった。

「いったい誰が食べたの？しかも食べかけで。。。もしやフジワラさんとベラ？」

マヤはその食べかけの2本のうち1本のクローネを手にとろうとしたとき、

小さな銀の月のペンダントヘッドが、ベッドの上にちらばっている、クローネの食べくずの中に

紛れながら、ピカピカと輝いているのがみえた。

ピカピカ Pika Pika

終

あとがき

大分結末が予定より変更しましたが、  
結局これでよかったのかなと  
思います。

h-s

pika pika あなた2逢いたい☆

<http://p.booklog.jp/book/31456>

著者：hi-chewストロベリー

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/frankpunk/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31456>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31456>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.